

特集

生き物の多様さはわたしたちの一部

～自然体験と生物多様性～

陸 齊

山、森、高原、湖など、信州には美しい自然があります。しかしわたしたちは、そのような自然に深くわけいらなくても、通学や通勤の途中で道端に咲く花をみるだけで、あるいは雨に濡れた草をみるだけで、新鮮な感覚に満たされることがあります。日々の生活のなかにも、意識するとしないと関わらず、途絶えることのない自然体験があります。なかでも生き物の多様さは、さまざまな体験を私たちにもたらししてくれます。

微妙な感性の差

ある昆虫学者がこんなことを言ったことがありました。「哺乳動物が昆虫と違うのは、こちらが見ている相手に「見られている」のがはっきりわかる点かな。」哺乳動物を相手にする仕事が多い私にとって動物に見られるのは当たり前なことなので、その指摘は新鮮でした。生物体験が、微妙な感性の差により人それぞれ異なることに気づきました。



見ている相手に「見られている」

体験の積み重ね

人は、持って生まれた可能性をさまざまな体験によって広げ、豊かにし、実現していく能力を持っています。その実現の過程は、一人ひとりが遭遇する偶然ともいえる体験の積み重ねから成り立っています。

生物体験が自分をつくる

人は、体験した生物の特性に応じた反応を身につけていきます。生物体験により、その生物独特の挙動に応じた感性・感覚や知識・技能を育てていくことになります。そのような、相手となる生物との関係に基づく特有の

感性・感覚や知識・技能を身につけた自分は、ユニークな一人の人間であると同時に、相手の生物にとっても特別な存在、特別な環境になっています。このようにして、人は環境を認知すると同時に、自身を、ある生物にとっての環境の一部にしていきます。このような環境と人とのコミュニケーションが、一人ひとりの人生を作ります。

例えば、ある土地（地域）との交流が長く深い場合、その人は、その土地でのさまざまな自然体験により、豊かな自分を実現することが可能になりますが、そのような豊かな自分は、その土地（自然）と一体である、ということができるでしょう。その人にとって、ある土地から一つの生物種がいなくなることは、自身の感性・感覚や知識・技能、つまり自分の一部が欠けるのと同じことです。体験したことのある生物種が、体験したときと同じか、またはそれに近い状態で保存されなければならない、というのは、かけがえのない自分自身を守るためにも必要なことなのです。

多様な可能性を守る

このようにして、人は、個人毎に別々の多様な可能性をもとに、周囲の自然の複雑さに応じた固有の人生を築いていきます。そして、そのような個人の集まりである集団は、文化を含むさらに幅広い多様性をもつこととなります。人間関係に基づく集団としての可能性は、単に個人の可能性の寄せ集めではないからです。生物多様性を保存し続けることは、このようなわたしたちの多様な可能性に道をひらくことにつながっています。



森での自然体験——寝ころんでみる